

1 主題設定の理由

【ねらいとする道徳的価値】

公德心とは、社会の一員としての自覚に基づき、公共のマナーや利益を守ろうとする心を指している。公共物を大切にすること、人に迷惑をかけないようにすること、公共の利益のために進んで奉仕することは、公德心の表れと言える。これらのことは、社会生活上のルールや基本的なモラルなどの倫理観並びに遵法の精神につながり、規範意識の育成には欠かせない要素である。しかし、集団よりも個人を優先する現代社会においては、自己抑制力や忍耐力を培う場が減少し、公の場を意識して行動しようとする心が十分に育っていないという状況にある。公の場の秩序維持を意識し始めているこの時期の児童に、不特定多数の人々を想定して行動することの大切さを学ばせることは、たいへん意義深いと考えた。

【道徳的価値に関わる児童の実態】

本学級の児童は、公共物を大切にしたり人に迷惑をかけないようにしたりすることの大切さは知っている。しかし、自分を律する態度や他人への配慮が不足しているため、「分かっているけれどできない。」という状況にある。「ごみが落ちていることに気づきました。あなたはその後どうしますか。」という日常生活に関する問いに対し、「自分から進んで拾う。」と回答した児童が10名、「人から頼まれたら拾う。」と回答した児童が10名、「その時の状況による。」と回答した児童が15名、「拾わない。」と回答した児童が2名であった。「自分が落としたりした物ではない。」という意識が強く、公共の場を大切にするためには自ら行動することが必要であるという意識は十分に育っていないと言える。

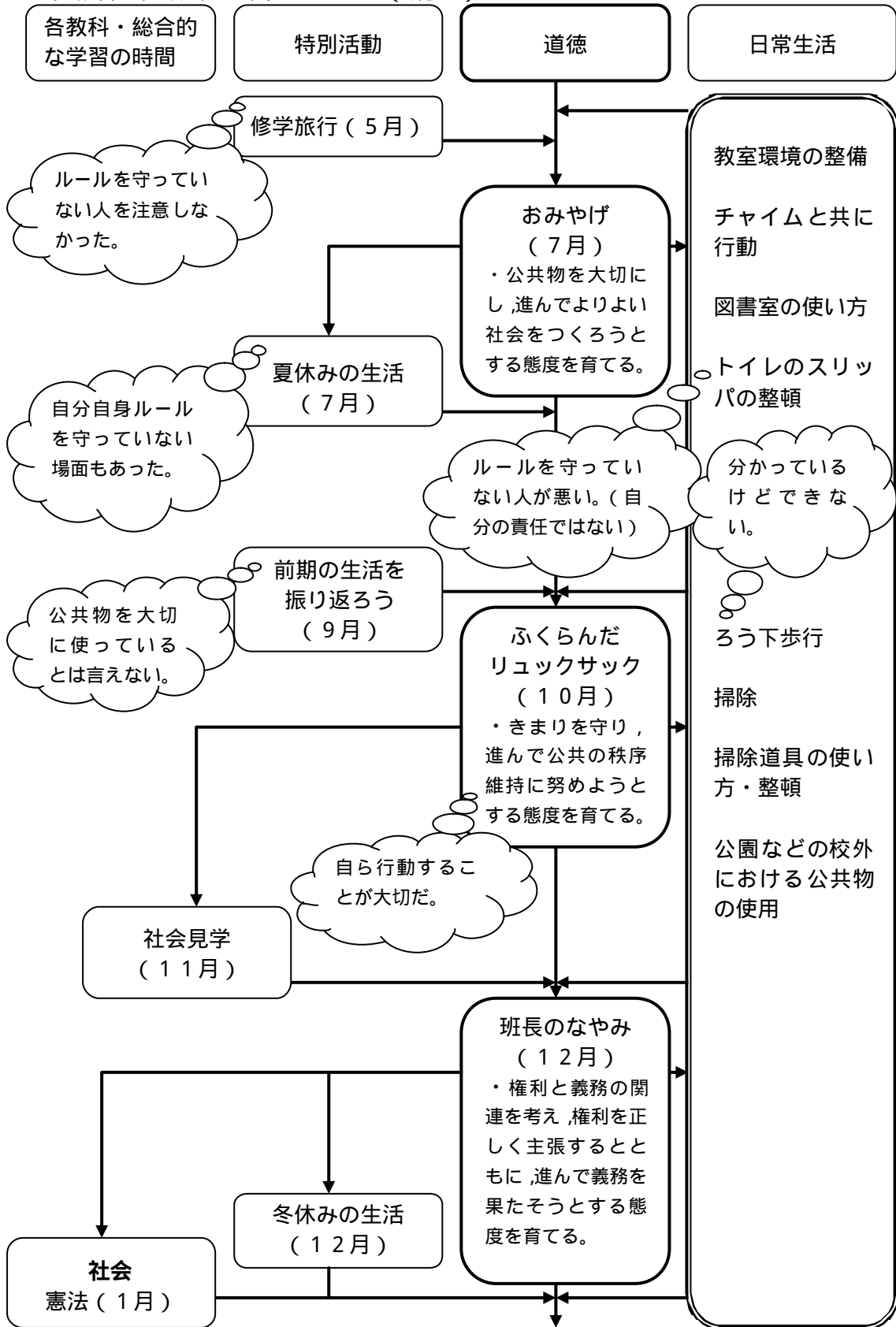
【資料名】

ふくらんだりゅくさく（「6年生の道徳」 ぶんけい）

【道徳的価値の自覚を深めるためのたて】

- ・導入では、マナーが守られていない状況を写真で提示し、「これを見てどう思いましたか。」と問うことにより、価値への方向付けを行いたい。
- ・展開前段では、他人の捨てたごみを拾う親子を目の当たりにした主人公の心の揺れを通して、より高い価値に迫らせたい。ここでは、ハートメジャーとネームプレートを併用することにより立場や理由を明らかにし、「他人を責めるのではなく自ら行動することが大切である。」という考えに焦点を当てた対話を取り入れたい。
- ・展開後段では、ワークシートに「4段階自己評価（理由を含む）」、「大切にしたい考え」の欄を設け、価値に対する自分の現状をつかませたい。
- ・終末では、「拾えば街が好きになる運動」のホームページを通して、求められている価値について確認させたい。

2 他教科・他領域との関連について (公德心)



3 資料について

資料の概要

ごみが散乱している状況を嘆く主人公の前に、一組の親子が現れる。父親が子どもたちに言った「さあ、拾おう」という言葉が主人公の心にも響く。主人公は、ごみを拾う親子の姿を通して考えを改め、自らごみを拾い始める。

資料の分析

場面	価値に関わるキーワード	主人公の心情と価値意識
1 山の状況を嘆く場面 (価値に気づいていない場面)	・至る所に、紙くず、空き缶などが散乱していた。 ・ラジオの音をいっばいに大きくしている若者たち。 ・辺りの空気までよごれてしまっている感じ。 ・以前、自分がよくしたように～	○何て汚いんだ。 ○人のことを考えていない若者が多い。 ○こんなことなら来るのではなかった。 【自然愛】 【公德心(一)】
2 親子の会話を耳にする場面 (変化のきっかけとなる場面)	・ぼくらだけそんなことしてもしかたがないよ。 ・あんなにあるんだもの。	○捨てた人が拾うべきだ。 ○わたしには関係ない。 ○そんなことをしても無駄だ。 ○父親の言うことも分かる。 【公德心(一)】
3 父親の発言に心を動かされる場面 (価値に気づいた場面)	・きたなくていやだと言っていたじゃないか。 ・いやだと言っているだけではどうにもならないのではないかな。 ・さあ、拾おう。 ・わたしも立ち上がって、…ビニールの袋につめ始めた。	○どうしよう。 ○いろいろ理屈をつけていた自分がはずかしい。 ○一緒に拾おう。 【公德心(-)】 【公德心】
4 親子が下山する姿を見つける場面 (価値を確認する場面)	・リュックサックのふくらみがすばらしく映った。 ・山の風がなんとも心地よかった。	○少しでもきれいになって気持ちがいい。 ○やはり行動に移してよかった。 ○みんなも同じような気持ちを持ってほしい。 【公德心】

4 本時のねらい

父親の発言で考えを改め、ごみを拾い始めた主人公の姿を通して、きまりを守り、進んで公共の場の秩序維持に努めようとする態度を養う。

5 指導過程

段階	学習活動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
導入	1 写真を見て話し合う。	この写真を見てどう思いましたか。 ・たいへん汚い。 ・なぜこのようなことをするのだろう。	・マナーが守られていない状況を提示することにより、価値への方向付けを行う。
展開前段	2 資料を読んで話し合う。	山に到着した時、わたしはどうしてごみを拾わなかったのでしょうか。 ・わたしが捨てたものではない。 ・捨てた人が拾うべきだ。 ・私一人が拾っても無駄だ。 父親がごみを拾い始めた時、わたしはどんなことを考えたでしょう。 【拾う】 みんなが少しでも気持ちよく過ごせる。自分たちが拾えば他の人も拾い始めるかも知れない。 いろいろ理由をつけて何もしなかった自分がはずかしい。 周りの人が拾っている。 【迷う】 【拾わない】 わたしたちだけ拾っても無駄だ。 捨てた人が拾えばよい。(わたしが拾う必要はない。) 自分が拾わなくても誰かが拾うだろう。 面倒だ。 自分が捨てたわけでもないのに、それでも拾うのかな。 知らない親子なのに、それでも一緒に拾うのかな。 ごみを拾い終わったわたしは、どのように考えが変わったでしょう。 ・少しでもごみが減れば気持ちがよい。 ・他人を責めるのではなくまず行動に移すことが大切だ。 ・みんなも私たちと同じような気持ちをもってほしい。	・場面絵やカードを活用することにより、他人を責める主人公の心情に共感させる。 ・ハートメジャー及びネームプレートを用いて、どの考えに近いのか児童の立場を明確にさせる。 ・板書を通して、児童の発言を類型化する。 ・同じ立場（例～拾う～）でも理由付けをさせることにより、価値レベルの違いを明らかにする。 ・立場の違いや価値レベルの違いに応じて意図的指名を行い、より高い価値に気づかせる。 ・切り返しの発問を行い、人間の弱さを引き出す。 ・山へ到着した時の考えと比較させることにより、他人を責めるのではなく、まず自分が行動することの大切さに気づかせる。

展 開 後 段	3 自分の生活を振り返る。	公共の場を気持ちよく使えるようにするために自ら進んで行動していますか。 ・みんなのことを考えて進んで行動している。→理由 ・みんなのことを考えているが進んで行動していない。→理由 ・みんなのことまで考えていなかったので行動していない。→理由 ・自分自身がルールを守っていない。→理由	・公共の場を写真で提示することにより，具体的な場面を想起させる。 ・ワークシートには，自己評価とその理由，これから大切にしていきたい考えの三つを書き込めるようにする。
終 末	4 ホームページを見る。		

6 評価について

評価方法	中心発問における児童の反応	ワークシート
道徳性の 見取り	・みんなが気持ちよく過ごせるように少しでも努力をすべきだ。 ・他人を責めるのではなくまず行動に移すことが大切だ。 ・自分たちが拾えばみんなも拾うかもしれない。	・公共の場でみんなが気持ちよく過ごせるようにするために自ら行っていること。

7 板書計画

主題名 ・みんなが気持ちよく過ごせるように少しでも努力をすべきだ ・他人を責めるのではなくまず行動に移すことが大切だ ・自分たちが拾えばみんなも拾うかもしれない	拾う 拾わない 山 の 風 が 心 地 よ い ・みんなが気持ちよく過ごせるように少しでも努力をすべきだ ・他人を責めるのではなくまず行動に移すことが大切だ ・自分たちが拾えばみんなも拾うかもしれない 場面絵	場面絵 ふくらんだリユックサック 至る所に紙くずや空き缶 弁当を広げた ・わたしが捨てたわけではない ・捨てた人が拾えばよい ・わたし一人が拾っても無駄だ
---	--	---

資料

ふくらんだリュックサック

今年の夏、わたしは十年ぶりに丁山に登った。

久しぶりに歩く山道は、以前とはすっかり変わっていた。ひかくなならないほど登山者が多く、休けいの小屋も増えていた。しかし、何よりもおどろいたのは、ごみの多いことであつた。至る所に、紙くず、空きかんなどが散らばっているのである。

頂上に着くと、ここもまた、たくさんの人とごみ。ラジオの音をいっぱい大きくしてさわいでいる若者たち。山小屋の横手の斜面をよこして散らばっている空きかん。辺りの空気までよごれてしまっている感じである、わたしは、来るのではなかったと、後悔した。

わたしは、できるだけ、人の群れからはなれてこしを下ろし、水とうの水を飲みながら、だんだん腹立たしくなってきた。

― だいたい人が多すぎる。山の礼ぎを知らない者は山に来なければいいのだ。

わたしは、以前、自分がよくしたように、しばらく周りの山々の様子をながめながら弁当を広げた。

そのとき、すぐ近くから親子の会話が聞こえた。

「ひどいもんだなあ。帰るとき、近くに散らかっている空きかんを集めて持っていくか。」と、父親が言うと、兄が、

「でも、ぼくらだけそんなことをしてもしかたがないよ。あんなにあるんだもの。」

と言う。兄は中学生、弟は小学生のようであつた。

「二人とも、さつきは、きたなくていやだと言っていたじゃないか。」

「それは、そうだけ……。」

「いやだと言っているだけでは、どうにもならないのではないかな。ごみを一つ持って帰れば、それだけごみが減るわけだ。」

父親は、そう言って、空きかんを拾って自分のリュックサックに入れ始めた。

わたしは、はっとした。人が多すぎるとか、よごれていやになつたとか、いろいろ理くつをつけているだけの自分がはずかしくなつた。

「さあ、拾おう。」

父親は兄弟に言ったのだが、わたしには、それがわたしへの心の命令でもあるように感じられた。

わたしも立ち上がって、周りにある紙くずなどを集めて、ビニールのふくろにつめ始めた。ふと目を上げると、兄弟もそれぞれ自分のリュックサックの口を広げて、空きかんを拾っていた。兄のほうが、空きかんを足でふんでリュックサックに入れると、弟もそれをまねた。

やがて、リュックサックがいっぱいになると、三人は、父親を先頭にして山を下りていった。そのリュックサックのふくらみが、わたしの目に、どんなにすばらしく映つたことであろう。その後ろ姿を見ながら、わたしもリュックサックを背負つた。尾根をわたる風がなんとも心地よかった。

萩原武雄の作品による